

出口の小間物店に佇みけるに、村川六郎右衛門が、醉機嫌の聲して、長袋の烟草入があらば、取つて置けと、門まで送る女房に言葉残すも可笑し。

〔好色一代女〕淫婦の美形

今の世のよねの好きぬる風俗は、○中 禿いひやりて、供の者に持せおきし、白き奉書包の烟草とりよせ吞むなど、○下

〔ひとりね〕多葉こ入の製もいろく、有て筆にも盡しがたけれども、とかく奉書の紙に入たるよしと也、奉書の紙も、繪やかすみて書たらんはさもなかりし、白きをよしとすべしと云り。

〔好色一代女〕濡問屋硯

繼煙管を無理どりに、合羽の切のたばこ入をしてやり、

〔其砧前〕往事雲千里、高名土一丘、

近い御幸の東迄沙汰

翌の日も期さぬは紙のたばこ入

潮朝  
沾山

〔人倫訓蒙圖彙〕無節竹師○中 若蕘入紙をもつてさまざまにつくる、所々にあり、草は滑草師

これをつくる、寺町通の下にあり、

〔我衣〕寶曆六子五月、京都ヨリ、紙ニ蠟ヲ引、漆ニテ斑ヲ入、ベツカフノ如クシタル烟草入下ル、代三  
夕位、大ニハヤル、

〔嬉遊笑覽〕器用羊羹といふ紙烟草いれ、四五十年前、江戸橋四日市の竹屋清藏にて、かます形なるを百文づゝに賣たり、其後松本屋といふ紙たばこ入の棚を、田所町に出して、ぐすべ紙のよきを製す、

〔近世職人盡畫詞〕竹屋は、松本が紙に勝んことかたくなん。